

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 17 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520535

研究課題名(和文) 英語焦点構文の非焦点的分析

研究課題名(英文) A non-focal analysis of focus constructions

研究代表者

秋 孝道 (AKI, Takamichi)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：60192895

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：It was Mary that you spoke to. What John did was wash himself. などの「焦点」構文に関しては、その焦点要素を特別な位置に配置し、その位置で焦点の意味機能を付与するという分析法が主流となっている。一般的に、この位置に配置された要素のさらなる語順変更は不可能であることが観察されているが、上記構文ではこの語順変更操作が実際には可能であるので、上記分析法を維持することは困難である。そこで、焦点以外の要素を「前提」位置に配置しその意味機能を付与し、その結果としてデフォルト的に焦点要素を焦点と解釈する分析法の妥当性を検証した。

研究成果の概要(英文)：Many papers propose that the focus element of the focus construction (e.g. It was Mary that you spoke to. What John did was wash himself.) is moved in a specified place (i.e. focus place) and is given a focus role there. Although elements in such a specified place generally are impossible to rearrange, the focus elements of the sentences above actually can be moved to another place, and the proposal mentioned above cannot be maintained. Our proposal is that the element other than the focus element in the focus construction is moved in another specified place (i.e. presupposition place) and is given a presupposition role there, and subsequently the focus element is given a focus role as a default value.

研究分野：英語学、生成文法、統語論、意味論、音韻論

キーワード：焦点 前提 分離CP仮説

1. 研究開始当初の背景

(1) 主語場所句倒置文、分裂文、疑似分裂文の焦点要素は、焦点位置に移動していないと考えるべき根拠がある。まず、主語場所句倒置構文において動詞と動詞句副詞の間に生ずる焦点要素(主語)は右方焦点転移によって文末に移動することが可能であり、また分裂文の焦点要素(及びその一部)は、WH 移動によって文頭に移動することが可能であり、これらの焦点要素は一般に観察される「移動要素の凍結性」を示さない。また、様々な研究者が主張するように、疑似分裂文の基底語順が「焦点要素 + WH 節」であるとすれば、疑似分裂文の派生において、焦点要素は移動していないことになる。次に、主語場所句倒置文と分裂文の焦点要素は、上述のように、WH 移動と右方焦点転移という焦点化操作を受けることが可能であり、この事実、これらの焦点要素が、焦点化操作適用時に「非焦点要素」として機能していたことを示していると考えられる。本研究代表者は、以上の考察を基にして、当該の焦点構文では、まず、「前提部分」が前提関連位置に移動し前提的談話機能を付与され、二次的に焦点要素が焦点として解釈されるという着想を得るに至った。

(2) 本研究の「前提部分が前提機能を付与される」という立場に立つと、分離 CP 仮説を採用しながらも、場所句倒置文と疑似分裂文に対する全く新しい分析法が浮かび上がる。具体的に言えば、主語左方に設定された「前提」機能が付与される位置(暫定的に旧情報は付与される話題句内の位置と考える)に、場所句倒置文の場所句と疑似分裂文の WH 節が移動され、前提機能を付与される。その後、文の主要断言機能が付与される FP 内の位置に、話題句内の前提部分と後続要素が全体として移動され、「新情報を担うことが原理的に可能な FP 内の末尾要素が焦点として解釈される」という一般的解釈規則によって、それぞれの焦点要素が二次的に焦点と解釈される。分裂文では、その従属節部分が話題句内に移動され、前提機能を付与されて、次に、虚辞 *it*・*be* 動詞・焦点要素の連鎖だけが FP 内に移動され、焦点要素が二次的に焦点と解釈されるという派生方法を仮定することができることになる。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、まず、焦点要素の非焦点的特性を掘り起こす作業を行い、並行的に、当該の焦点構文と他の焦点構文の統語・談話機能上の相違を明らかにし、二種類の焦点構文の峻別を進め、さらに、「前提部分」が担う談話機能特性を詳細に検討して、その本質の解明を目指す。これらの作業を通して、次の段階の目標、すなわち、当該構文における前提的談話機能付与及び焦点解釈の具体的メカニズムを解明することが可能になる。

(2) 焦点構文を分析する場合、原理的には、焦点要素に着目する立場と、「前提部分」に着目する立場があり得る。従来の殆どの研究では前者の立場が採用されているが、本研究は後者の立場に採る。さらに言えば、従来の研究では、焦点要素が、焦点位置に移動されそこで焦点としての談話機能を付与されると考えられているが、上述した理由により、本研究では、ある種の焦点構文では、「前提部分」がある位置に移動され、そこで前提的談話機能を付与されるという立場を取る。このように、本研究は、従来と全く異なった立場を採用し従来と全く異なった分析法を展開する、斬新な取り組みである。

(3) 最近の焦点構文研究では、FP の指定部に焦点要素を移動し、そこで焦点の談話機能を付与して焦点構文を導く分析が提案されている。しかしながら、これらの分析を本研究で扱う焦点構文に応用することは、理論上困難である(また上述のように経験的にも妥当でないと考えられる)。これに対して、本研究は、極めて斬新で挑戦的な考え方に立脚しながらも、これまでの理論的枠組みの中で、具体的に実行可能な新たな分析法を展開することができ、大きな成果をあげることが出来る。

3. 研究の方法

(1) 第1段階の研究では、焦点構文の焦点要素の諸特性に関する実証的な考察を行った。まず、先行研究の資料収集を進め、これまで明らかにされてきた焦点要素の統語的、談話機能的、音韻的特性に関して如何なる事実観察がなされてきたか、またどのような考察・分析が提示されてきたかを丹念に調査した。その上で、「焦点に特有であると考えられてきた特性が、それぞれの焦点構文において本当に観察されるのか」という問題意識を常に念頭において、焦点構文の諸特性を綿密に考察した。この際に着目したのは、主に、下記のような項目である。

- 焦点要素が「移動要素凍結性」を示すのか否か
- 焦点要素が「別の談話機能付与に関わる移動」を受けるのか否か
- 焦点要素を含む焦点構文が「移動の島」を形成するのか否か
- 焦点要素が「焦点強勢」を担うのか否か
- 焦点要素が「音調の切れ目」を伴うのか否か

このような作業を通して、焦点としての条件を完全に満たす焦点要素と、そうでない焦点要素を峻別し、後者の焦点要素を持ち「焦点構文の非焦点的分析」の対象なる焦点構文を特定することに努めた。当然であるが、これら一連の研究においては、新たな研究書・文献の入手、他の研究者との意見交換、母語話

者への言語知識提供の依頼などを行った。が必要となる。特に、関係図書・文献を豊富に所蔵し、関連研究が行われている研究機関への出張を実施した。

(2) 第2段階の研究では、引き続き、当該の焦点構文の焦点要素に関する調査研究を進めた。特に、焦点要素とその周辺部の要素の考察に集中して取り組んだ。上述した具体的分析法を採用するために、従来の分析法と異なり、当該焦点構文の「前提部分」を除く部分、つまり、主語場所句倒置文の動詞・焦点主語要素の連鎖、分裂文の虚辞・連辞・焦点要素の連鎖、疑似分裂文の連辞・焦点要素の連鎖を、「非前提的」もしくは「新情動的」と想定することが可能であることを示した。そして、この想定は十分に経験的妥当性をもつものであると考え、その裏付け作業を行った。このことによって、当該焦点構文の二次的な焦点解釈は通常文の焦点解釈メカニズムによってなされるという次の段階への研究の可能性が生まれた。このような作業と同時並行的に、当該焦点構文の「前提部分」の談話機能特性の考察も進めた。この談話機能を「旧情動的話題」と考える可能性の妥当性を検証すべく「前提」「旧情動的話題」という二つの談話機能概念の実証的な比較検討作業を行った。「話題要素」の特性に関しては、統語的、談話機能的、音韻的研究が十分に進められているので、これらの研究を基礎にした作業を実施することができた。ここで考察を加えたのは、下記のような項目である。

移動要素凍結性
移動の島
音調の切れ目
否定作用域
文末追加表現

第1段階同様の機関へ研究調査・資料収集のための出張を行った。また、新たな研究書・文献の入手、他の研究者との意見交換、母語話者への言語知識提供の依頼などを実行した。第2段階の研究により、当該焦点構文の「非前提部分」の発展的実証研究と「前提部分」の基幹的実証研究が終了した。

(3) 第3段階の研究では、まず、「前提部分」の実証的研究をさらに進めて「前提部分」が担う談話機能の本質を明らかにした。さらに、当該の焦点構文の派生に関わるメカニズムの解明を目指し、分裂CP仮説を想定した理論的研究を行った。この際、「前提部分」の移動に加え、「非前提部分」の語順派生の仕組みを明らかにした。これは、他の焦点構文に比べて、より複雑な語順を持つこれらの「非前提部分」の派生のメカニズムを解明できて初めて、当該焦点構文の本質を捉えることが出来るからである。なお、理論的研究に必要な研究書・文献の他に、補充的な実証研

究で利用される研究書・文献を購入した。また、第1段階・第2段階の研究と同様に、関係研究機関への研究調査・資料収集の出張を行った。研究成果は、現在印刷中の雑誌に掲載される。

(4) 全体として、「焦点に特有であると言われる諸特性が、当該焦点構文の焦点要素に本当に観察されるのか」という問題意識を念頭において、当該焦点要素の特性を綿密に考察し「焦点構文の非焦点的分析」の対象なる焦点構文を特定した。次に、当該焦点構文の「非前提部分」を「非前提的・新情動的」であると想定することができることを示した上で、「前提部分」の談話機能特性の考察を進め「前提部分」が「旧情動的話題」を担うという仮説の妥当性を明らかにした。最後に、分裂CP仮説を想定し「前提部分」の移動・「非前提部分」の語順派生に関わるメカニズムを解明する理論的研究を進めた。

4. 研究成果

(1) 本研究の研究成果の内容は、下記のようにまとめることが出来る。

主語場所句倒置文、分裂文、疑似分裂文などの焦点要素は、焦点位置への移動を受けず元位置に留まっていると考えるべき根拠を示した。

主語場所句倒置文と分裂文の焦点要素は、元々は「非焦点要素」として機能していたと考えるべき理由を明らかにした。

焦点要素が焦点位置で焦点機能を付与されるという標準的分析から離れて、当該焦点構文では、まず、焦点要素以外の部分(以下、「前提部分」)が前提関連位置に移動し前提的談話機能を付与され、元位置を占める焦点要素が、二次的に焦点として解釈されるという「英語焦点構文の非焦点的分析」の妥当性を示した。

この分析で仮定すべき各種メカニズムの解明を目指した。

この際、下記のような新たな視座に立った。

焦点要素ではなく「前提部分」に着目した。焦点要素ではなく、「前提部分」が移動され談話機能を付与されると仮定し。斬新かつ挑戦的な分析法を目指した。

本研究代表者に知る限りでは、これらの知見は初めて明らかにされたものであり、焦点構文研究に対して新たな視点を提供すると考えられ、そのインパクトは大きなものになると考えられる。

(2) また、本研究での音韻論的考察をさらに発展する課程で、日本語のアクセント変化の現象の興味深い特性を知ることになり、まったく異なった分野において、いわば副産物的

ではあるが、興味深い研究成果を公表することができた(下記参照)。さらに、本研究で得られた知見をもとにして、現在、文頭に現れる述語表現の研究を進め、着々と研究成果を積み上げており、平成28年度科学研究費補助金に応募する準備を進めているところである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

秋 孝道、英語焦点構文に関する覚え書き、英文学会誌、31 巻、1-4、2015(印刷中)、
査読なし

秋 孝道、日本語の連用形転用名詞のアクセント変化と英語のゼロ接尾辞分析について、人文科学研究、135 巻、47-58、2014、
査読なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

秋 孝道(AKI, Takamichi)
新潟大学・人文社会・教育科学系・
准教授
研究者番号：60192895